山梨新報「直言」原稿

2006年12月15日

まだ発見されない日本の「子供」

山梨大学名誉教授・前山梨大学副学長　伊藤　洋

人間の生涯に「子供」という一時期が特別なものとして存在しているということは、今では誰でも知っている。だが、そういうことを認識するようになったのはそう古いことではない。こういうことを言い出したのはジャン・ジャック・ルソー（1712～78）だと言われている。これを「子供の発見」などという。「発見」とは少々大袈裟ではないかとも思われるが、ウガンダ内戦の少年兵や性奴隷少女などを見れば、子供は未経験な小さな大人として扱われていて、世界には今でも「子供」を未発見な国や地域があることが分かる。

ルソーによれば、「子供」とは人間の生涯で「特別な時期」であり、この時期に「教育」されることによってその後の「大人時代」において豊かな人生が保証されるというのである。こういう人生モデルとして彼は小説『エミール』を書いた。後に近代国家が全て義務教育を法制化したのはこういう考え方によったのである。皮肉なことに、ルソー自身は自分の数多い子供達の養育は全くしていないダメ親父だったのだが。

こうして、今では世界のほとんどの地域で子供は「発見」され、子供の教育の大切さが痛いほどによく理解されていて、それでいて、「あなたは『教育』とはなんだと思いますか」、こう真正面から問われると、グッとつまって答えられなくなるのが「教育」の難しいところである。

よく知っているつもりだが、真正面から尋ねられるとグッと詰まって答えられないような問題というのは、きっと長屋談議に陥ってしまう。まして、教育など全くの無知の上に偏狭な観念でしか物事が考えられないような政治家が教育を語るとんでもない方向に制度が曲げられてしまうから怖い。最近は、テレビのスタジオ討論番組などでも盛んに「教育」が論議されているが、どれを見ても聞いてもヒステリックでピンボケで、残念ながら傾聴すべきものはほとんど無い。

ところで、「教育」、特に学校教育では暗黙のうちに次のような前提が働いている。

A：少年少女は無限の能力を持っている。それを引き出すのが教育である。そのために、①詰め込みと言われようと、スパルタと言われようと子供時代に知識を教え込まなければならない。②いや、「ゆとり」をもって、自発的に出てくる芽をじっくりと育てることが教育である。6・3・3・4の16年間にカリキュラムを按分して必要量を学習させればよいのだ。

B：無限の能力などと言うのは幻想だ。人間は放っておけばサルのようになってしまうのであって、教育して初めて人間になれるのだ。狼に育てられたという「オオカミ少年」の例を見よ。だから、徹底的に子供期に人間として必要な知識や感性を刷り込んでやらないといけない。｜

総じて、戦後の大勢としての教育観はAであろう。そのうち、A｜①は文部科学省がこの間推し進めてきた教育行政の根っこにあった考え方ではなかったか。そして、加熱する受験競争の中でその反省として打ち出された考え方として、A｜②が02年から始まった「ゆとり教育」観で、斬新だが今ではあまり評判がよろしくないようだ。

そして、安倍晋三首相を初めとする現与党の教育観はBである。これは、戦前の伝統的教育論に酷似しており、事実明治5年の義務教育頒布はこういう論理によっていたのである。そのために、尋常学校において国民国家の臣民として、国民統合のための知識を徹底的に身に付けることが強調されたのである。

忘れてならない教育観が、実はもう一つある。

C：子供は、子供である時期にすでに十分に個性をもって活動している。ただ、これを放置しておくと乱雑で無統制なままであるので、これを指導者が個々に丁寧に整理してあげて、「実践的」に方向を定めてやれば、良い独立した大人になれる。これがアメリカの哲学者ジョン・デューイのプラグマティズムであり、日本の戦後教育はこういう教育観を受け入れて再出発したのであった。しかし、占領が終わるや否や、待ってましたとばかりにこれを放棄して、前述の教育行政へと移行して行ったのである。

「教育とは何か」という議論を吹っ飛ばしたまま「教育基本法」が変更されてしまった。そこでの議論を見ている限り、ウガンダ同様この国でも未だ子供は「発見」されていなかったのだと考えさせられるのだが。